

紀要

■設立40周年記念号

【小特集】東近江市相谷熊原遺跡をめぐって—縄文時代草創期の遺構と遺物

- | | |
|---------------------------------|-----------|
| 「矢柄研磨器」雑考 —相谷熊原遺跡を理解するために— | 松室 孝樹(1) |
| 鈴鹿山中の遺跡にみる選地の原理 —相谷熊原遺跡の理解に向けて— | 重田 勉(9) |
| 土偶の機能・用途に関する理解の移ろい | 瀬口 真司(15) |

*

*

*

高島市今津町弘川B遺跡出土の縄文土器 (2) 小島 孝修(28)

草津市志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群の様相 小竹森直子(42)

近江・湖東北部の埴輪 辻川 哲朗(48)

製鉄炉の設置方法について —源内峠遺跡1号製鉄炉の検討— 大道 和人(73)

古代建築物構造ノート —掘立柱の再考— 横田 洋三(81)

塩津起請文札と勧請された神仏 濱 修(86)

三重県桑名市西方廃寺出土の飛雲文軒瓦について
—桑名市博物館所蔵品より— 中西 常雄(92)

観音正寺と觀音寺城跡 (2) 伊庭 功(95)

遺跡出土の化粧道具に関する覚書 —夏見城遺跡出土の毛抜きから— 堀 真人(103)

将棋史研究ノート (5) 金将の役割 —金将の動きと配置から— 三宅 弘(116)

「忍者」研究の現状と課題 阿刀 弘史(120)

文化遺産としての琵琶湖

—「水」を介した人類と自然の永続的共生を示す資産群— 大沼 芳幸(124)

平成22年度滋賀県埋蔵文化財センター考古学体験学習を終えて…具志堅有紀(142)

保存処理30年の記録 中川 正人(148)

24

紀要

第 24 号

—設立40周年記念号—

2011. 3

財団
法人滋賀県文化財保護協会

保存処理30年の記録

中 川 正 人

はじめに

滋賀県において出土資料の保存処理を開始して本年度で30年が経過する。これまでに保存処理を実施した資料の総数は、約3万点にのぼる。その種類や材質、劣化状態は多種多様であり、その実態にあわせ保存処理を計画し実施してきた。この機会に、保存処理実施の基礎データである保存処理台帳をもとに処理に関する記録や写真を再整理した。保存処理受け入れ資料については、報告書への掲載に努めたが諸般の事情により不十分なものも多い。本稿では、これまで保存処理を実施してきた資料のなかから主なものを選び、その処理概要をまとめるとともに保存処理実績を検証する。

1. 滋賀県における保存処理の実態

(1) 保存処理施設および機器

滋賀県埋蔵文化財センター（以下、県埋文センター）が1980年4月に開所し、保存処理施設として1階の第1収蔵室に、木製品保管のための地下水槽およびPEG含浸装置が設置された。また、2階の保存処理室には、金属製品の減圧樹脂含浸装置をはじめとする機器類が備えられた。こうした施設と設備は、その後全国各地に設立されていく埋蔵文化財センターの先駆け的な存在であった。1980年代半ばより発掘調査件数が増加するとともに、県埋文センターでの出土資料の保存処理量も増大していった。

1992年には琵琶湖開発事業に関連した遺跡の整理調査を目的に、滋賀県立安土城考古博物館（以下、考古博物館）内に調査整理課が設置され、整理調査のなかに保存処理業務が位置づけられ関係機器の整備がはかられた。

(2) 保存処理台帳の再整理

「保存処理台帳」は、資料の受け入れと処理の内容、さらに処理の完了と返却を確認するための基礎資料である。当初、「保存処理台帳」は手書きによるカード形式であったが、その後一覧表形式を経て1983年以降はいち早くコンピュータによる表計算ソフトに移行し、その後バージョンアップを重ね現在に至っている。過去30年間にわたる保存処理の依頼件数は総数989件で、資料の受け入れは遺跡単位ごとの一括が多く、資料の保存処理実施点数はのべ30,693点にのぼっている。

保存処理資料を無機質資料と有機質資料に分類するならば、無機質資料としては、鉄製品、青銅製品、石やガラスなどがあり、有機質資料としては、木製品や漆製品、植物繊維製品などが含まれる。さらに、住居跡やカマド跡、土壙墓などの遺構保存や土層断面の剥ぎ取り転写なども保存

処理の対象である。30年間にわたる「保存処理台帳」のデータを種別ごと、年度ごとに集計し、保存処理実績一覧としてまとめた（表1）。

さらにこのデータをもとに、年度ごとの処理実績としてグラフ化した（図1）。このグラフを見てみると、1985年までは鉄製品の処理量が全体の半数以上を占めている。これは、従来の発掘調査において出土していた多数の釘等のサビ取りから保存処理を開始したためである。1986年からは発掘調査件数が急増していった時期もあり、木製品の処理量が年度の合計量を大きく上回っている。1990年から92年にかけては、処理量が大きく落ち込んでいる。これは大型の木製品の処理のため、実質の処理点数が減少しているためである。1993年からは処理量が激増しているが、これは前述したように、考古博物館の開館時に設置された保存処理機器が稼働し、とくに木製品の処理量が増加したことによる。

保存処理資料の種別ごとの全体比率は、鉄製品や青銅製品などの金属製品が21%、木製品および漆製品、繊維製品などが77%、その他が約2%である。この比率をみてもわかるように、木製品が全体の8割近くを占めている。これは滋賀県における遺跡の立地が関係している。すなわち、琵琶湖を取り巻く遺跡が低湿地の環境であるため木製品の出土比率が高い。全国的にみて、これは滋賀県の特色の一つである。

(3) 写真資料の再整理

保存処理前の現状写真および処理工程の写真記録は重要である。これまで保管してきた写真資料は、モノクロネガファイルが15冊で約3,600カット、カラーネガファイルが7冊で約1,700カット、スライド写真（リバーサルフィルム）収納ケースが54箱で約8,000カットにのぼる。写真資料の整理は、日誌および作業内容と照合しながら進め、整理する過程で撮影状態の良好なものを選択し、スキャナーでデジタル画像として取り込みデータ化した。なお、ここ数年以降は、すべてデジタル写真に切り替えている。

(4) 保存処理薬剤について

保存処理法としては、材質や劣化状態に応じた処理法を実施してきたが、使用薬剤は限られた種類の使用にとどめている。これは資料の再修理を考慮した結果である。将来必要とされる再修理のさい、以前の保存処理法や修理材料が問題となる場合がある。とくに文化財の修理に使用する材料は、リバーシブルな材料であることが求められる。すなわち、水や溶剤などに可溶であり、必要ならば容易に取

表1 保存処理実績一覧（処理年度／種類別）

処理年度／西暦	鉄製品	青銅製品	金銅製品	木製品	漆製品	織維製品	人骨	植物遺体	動物遺体	土製品	石製品	遺構	年度計
昭和56年／1981	451	40	0	2	12	4	0	102	0	7	0	1	619
昭和57年／1982	229	118	0	104	6	1	7	1	0	5	0	4	475
昭和58年／1983	447	17	13	1	22	3	1	0	0	7	0	6	517
昭和59年／1984	88	131	0	106	15	3	0	1	0	3	0	5	352
昭和60年／1985	511	57	4	446	61	5	0	1	57	4	1	8	1,155
昭和61年／1986	311	136	0	390	10	3	0	0	5	0	0	5	860
昭和62年／1987	251	202	0	441	62	0	0	1	0	0	0	3	960
昭和63年／1988	87	0	0	627	12	5	1	0	0	0	0	2	734
平成元年／1989	4	7	0	755	6	2	0	0	0	0	0	8	782
平成2年／1990	0	0	0	40	0	0	0	3	0	0	0	8	51
平成3年／1991	0	1	0	6	0	3	1	0	0	0	0	2	13
平成4年／1992	60	2	0	169	1	1	0	0	0	0	1	8	242
平成5年／1993	204	11	0	2,107	139	7	0	66	0	0	0	3	2,537
平成6年／1994	34	4	0	4,473	0	0	1	0	0	0	0	2	4,514
平成7年／1995	276	20	0	1,666	1	2	0	0	2	0	0	4	1,971
平成8年／1996	219	1	0	137	15	4	0	5	0	2	0	4	387
平成9年／1997	265	9	0	292	2	0	0	0	0	0	0	0	568
平成10年／1998	456	9	3	471	10	8	0	6	5	1	0	3	972
平成11年／1999	332	4	2	1,033	5	0	0	0	0	14	0	0	1,390
平成12年／2000	205	7	0	790	3	4	0	0	0	0	0	0	1,009
平成13年／2001	126	1	0	1,221	0	5	0	1	0	0	0	8	1,362
平成14年／2002	504	0	0	1,745	4	0	0	0	0	0	0	2	2,255
平成15年／2003	14	14	6	848	10	0	0	0	0	53	0	4	949
平成16年／2004	309	1	0	342	16	0	0	0	0	0	0	1	669
平成17年／2005	93	0	0	458	34	0	0	0	0	0	0	1	586
平成18年／2006	14	0	0	599	17	27	0	0	6	0	0	0	663
平成19年／2007	25	0	0	1,155	0	0	0	131	0	0	0	0	1,311
平成20年／2008	125	0	0	1,046	0	6	0	0	0	0	0	0	1,177
平成21年／2009	16	2	0	1,190	4	1	0	0	0	0	0	1	1,214
平成22年／2010	23	0	0	366	0	0	0	4	0	0	0	6	399
種類別合計	5,679	794	28	23,026	467	94	11	322	75	96	2	99	30,693

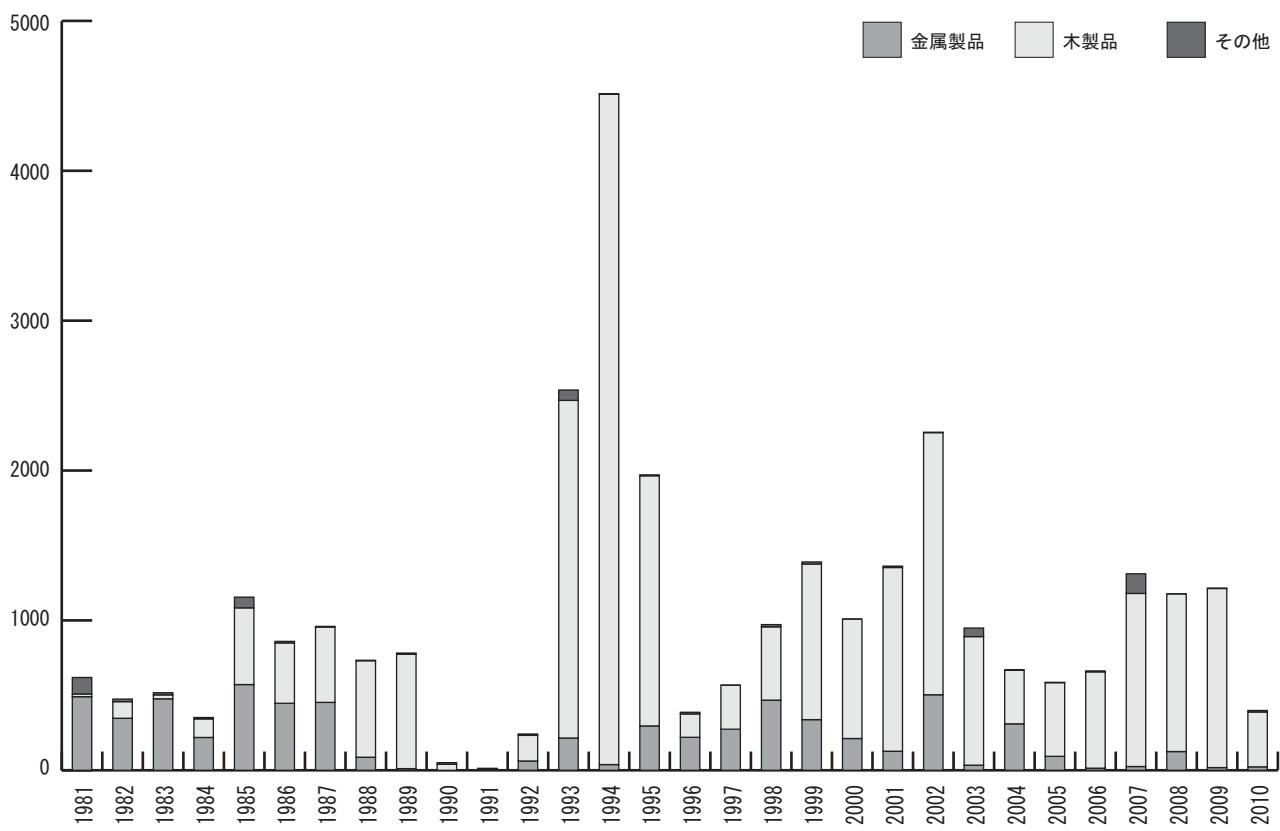


図1 保存処理実績グラフ

り除くことができる材料である。たとえば、木製品の保存処理の場合PEG含浸法を採用しており、PEGは高湿度の環境において種々のトラブルが生じやすいが、他の薬剤に比べて再処理が容易である。

（5）科学的調査機器の充実

保存処理にさきがけ資料の材質や構造、劣化状態を調査する手法として、X線ラジオグラフィー（X線写真法）や蛍光X線分析、赤外線観察などがある。前述したように、安土において整理調査課の設置とともにこうした基本的な分析機器が整備された。これらの機器類を活用する利点として、分析の結果をいち早く発掘調査現場や整理調査の現場に反映することができるようあげられる。また分析結果は、可能な限り報告書に掲載した。

（6）普及啓発活動

滋賀県埋蔵文化財センターでは、開館当初より『滋賀埋文ニュース』を刊行しており、同ニュースに付随する形で1982年から89年までの間、「保存処理ニュース」を編集し普及啓発に努めた。当初は手書き、それから和文タイプライター、そして初期のパソコンによる日本語ワードプロセッサーへと進展していく時期で、原稿作成方法の変革期の時代であった。

2. 保存処理成果概要

1981年から2010までの30年間を5年ごとに6期に分け、主要な保存処理資料118件の内容および写真データなどを、保存処理資料一覧表してまとめた（表2・3）。これらの資料は、今後の展示を含めた資料活用のさいに指標となるものである。次に、これら各期の保存処理の内容を概観する。なお、一覧表における遺跡の所在地は、旧市町村名のまま記載している。

（1）第1期（1981～1985年）

比叡山延暦寺・安鎮家国法遺構（写真1・2） 1982年に大津市比叡山延暦寺における防災施設工事にともなう発掘調査で、東塔地域大講堂の外周東北隅より銅板製輪宝、木製独鉛杵などが検出された。当初は室町時代に建立された講堂に伴う地鎮具と考えられていたが、次年度の発掘調査により新たに4カ所の埋納坑が検出された。埋納遺物として、銅製輪宝や木製独鉛杵、陶製燈明皿、七宝、香木、絹などがみられた。このなかで陶製燈明皿が江戸時代末期もしくは明治時代初期の製作とみられることから、この埋納遺構は室町時代の遺構ではなく、近世以降の国家や朝廷の平安を祈願する安鎮家国法の遺構と判断された。

これらの遺構のうち、遺存度の良好であった第2号埋納遺構（T-1）の切り取り保存を実施した。発泡硬質ウレタン樹脂⁽¹⁾で遺構を梱包して取り上げ、土壤は合成樹脂で

硬化させた。現在、遺構は延暦寺の国宝殿に保管されている。

（2）第2期（1986～1990年）

下之郷遺跡・カマド跡（写真3・4） 1986年、甲良町下之郷遺跡において、40基をこえる竪穴式住居跡が検出された。そのなかで住居跡（SH10）は、一辺が8～9m、床面積が約83m²にのぼる大きな規模で、さらに側壁の高さは40cm余りを残していた。また、同住居跡に付属するカマドが焚き口および煙道をともない良好な状態で残っていた。カマド部分の遺構の型取り保存を実施することになり、発泡硬質ウレタン樹脂で型取りをおこなった。

カマドの焚き口および燃焼室、煙道の空洞部分にウレタン樹脂を発泡させて充填し、次にカマド全体をウレタン樹脂で型取った。この凹型を原型としてカマドの形を復元した。このカマド遺構は、秋期の特別展のため県埋文センター・ロビーに展示した。

唐橋遺跡・橋脚遺構（写真5・6） 1988年、大津市唐橋遺跡において出土した橋脚遺構のなかの木材の年輪年代測定が実施された。測定試料は、いずれもヒノキ材の樹皮および辺材部を失った形状タイプCと呼ばれるもので、第1橋脚部材およびレベル調整用に使用されたとみられる板材の計3点の試料が計測された。その結果、最外年輪形成年が607年であることが判明し、この橋が少なくとも7世紀以降に建設されたものであることが明らかになった。

これらの橋脚部材は、県埋文センターにおいて新たに設置されたPEG含浸装置により保存処理を実施し、その後、滋賀県立琵琶湖博物館で実物大で復元され常設コーナーにおいて展示されている。

針江浜遺跡・地震跡（写真7・8） 1989年に高島市針江浜遺跡において地震跡が検出された。湖底に広がりをみせる針江浜遺跡の発掘調査は、周囲に鋼製矢板を打ち込み、遺構面を陸化させて調査を実施した。遺構にともなう土器から弥生時代中期の地震跡であることが判明した。また、地層断面には噴砂と呼ばれる液状化現象の痕跡をとどめていた。

通常の地盤は、土砂の摩擦によって地盤の安定を保っている。しかしながら、砂質土や砂地盤に地下水などを過剰に含んだうえ、地震などの振動によって摩擦が減少し液状化する。こうした液状化現象が下層の地盤で起きた場合、粘土質などの表層を突き破り、水と砂を同時に地表に吹き上げる噴砂と呼ぶ現象を起こすことがある。こうした現象が弥生時代中期に起き、そのうえに後の時代の堆積層がこの噴砂を保護したもので、県内では数カ所検出されている。

この噴砂遺構を保存するため、土層の剥ぎ取り転写法により遺構平面と噴砂断面を剥ぎ取り保存した。土層を剥ぎ取って転写するための主な薬剤は2種類がある。エポキシ系接着剤とウレタン系接着剤をそれぞれ土層転写用に改良

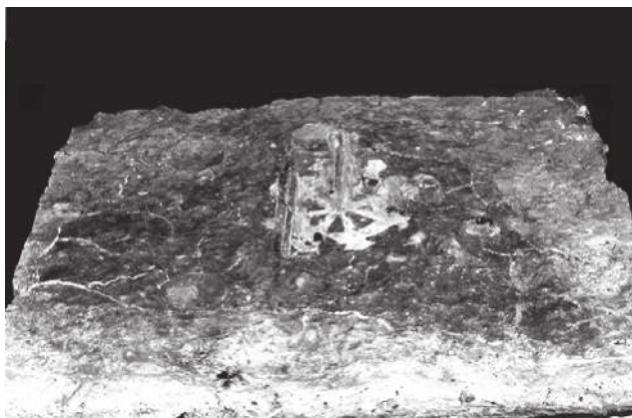


写真1. 安鎮家国法遺構（比叡山延暦寺・1983）



写真2. 安鎮家国法埋納遺物



写真3. カマド跡（下ノ郷遺跡・1986）



写真4. カマド跡遺構型取り保存



写真5. 橋脚部材の年代測定試料採取（唐橋遺跡・1988）



写真6. 唐橋橋脚遺構展示（琵琶湖博物館）

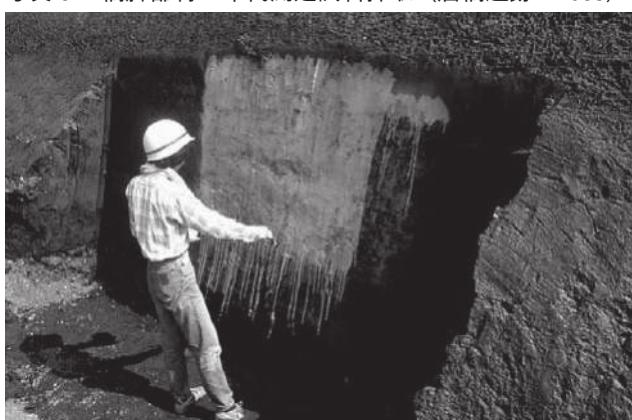


写真7. 噴砂跡断面土層転写（針江浜遺跡・1989）



写真8. 土層転写断面の洗浄

したものである⁽²⁾。これらの薬剤は、土層の種類や含水率などにより使い分ける必要がある。噴砂の土層は、水分を多く含んでいるため、まずウレタン系接着剤をアセトンで20%程度希釈し、噴霧器で断面に吹き付け硬化させ、次にエポキシ系接着剤を塗布して裏打ち用のガーゼを張り、さらにエポキシ系接着剤を塗布して硬化させた。剥ぎ取った土層断面は、パネル貼りにして安土城考古博物館の回廊展示に活用している。

雪野山古墳・鞞（写真9・10） 1989年9月27日、東近江市・竜王町雪野山古墳において古墳時代前期の古墳の発掘調査が実施され、古墳は未盗掘であり重要な遺構、遺物が出土していると、全国に大きく報道された。この報道に先立つ9月19日、雪野山古墳発掘調査団より石室内の出土遺物の保存処理について連絡があり雪野山へ登った。遺物のなかで特に鞞などの漆製品が石室内に散在し、保存処理を含めた取り上げについて現地で検討をおこなった。鞞の取り上げ作業は10月17日に実施した。

鞞は、銅鏃とともに残存しており、取り上げるさい粘土床をできる限り損傷しない方法をとることが必須の条件であった。実際の取り上げは、鞞の周辺に幅10cm深さ20cm程度の溝を掘り、この空隙に発泡硬質ウレタン樹脂を流し固めることで、鞞を支える粘土床とともに取り上げた。鞞側面に沿った溝の断面形状は、V字形になるよう溝を掘り込み、遺物を発泡硬質ウレタン樹脂で包み込むように固定して搬出した。

次年度に鞞を発泡硬質ウレタン樹脂の梱包から取り出し、鞞の内部を精査しながら解体作業を進めていった。この精査の作業は、翌91年度末までを要し、鞞の材質や製作技法に関する多くの情報が得られた。

引き続き第二次調査、第三次調査で石室に残された漆膜の取り上げを実施した。とくに、湿気の多い石室内での漆膜の剥ぎ取り作業は困難を極めた。使用樹脂はアクリル系樹脂（パラロイドN A D-10）を有機溶剤で希釈したものを漆膜に塗布し、ガーゼを張って強化した。気温や湿度の関係で乾燥が進まず、ドライヤーで樹脂を乾燥させる方法をとった。この作業は、狭い石室内で使用する有機溶剤の臭気との戦いであった。93年5月には鞞の各断片を実測図と照合して整理した。また、構造を解明するためX線写真を撮影した。

出土資料は報告書刊行後、一括して国の重要文化財に指定され、滋賀県立安土城考古博物館に保管を委託している。これらの資料は、展示など活用の機会が多い。そのため脆弱な状態のものは取り扱いに注意するとともに、定期的な点検を継続し、保管環境を再確認することが必要である。

（3）第3期（1991～1995年）

加茂遺跡・柄付き包丁（写真11・12） 近江八幡市加茂遺跡から出土した柄付き包丁の保存処理を実施した。この包

丁は、いわゆる複合製品で包丁部分が鉄、柄が木である。木質部分の処理にPEGなどの水溶性薬剤を使用した場合、金属部分に保存処理中および保存処理後にサビの発生が懸念される。そのため、非水溶性の薬剤を使用することが求められる。そうした条件に当てはまる保存処理法として、高級アルコール法を採用した⁽³⁾。

高級アルコール法による保存処理工程は、まず木製品に含まれた水をメチルアルコールに置換する。水からメチルアルコールに変えるためには、その濃度を3対7から5対5、そして7対3から全量をメチルアルコールに変える段階的な置換が必要である。これは、木材内部の水がアルコールと置き換わる時に生じる力を最小限に抑えるためである。しかしながら、劣化した木材の細胞は、水がアルコールと入れ替わるさい多少の収縮を引き起こす。この度合いが木材の樹種や劣化度、用材の部位により異なる。一般的に、広葉樹は収縮や変形が起きやすいとされる。この保存処理法の採用にはこうした特徴を考慮して判断することが重要である。

（4）第4期（1996～2000年）

中兵庫遺跡・泥除け付広鋏（写真13・14） 1996年に草津市中兵庫遺跡から、木製広鋏が泥除けと呼ばれる鍬の付属品とともに出土した。泥除けが装着した状態で、しかも完全な形で出土する例は非常にまれである。泥除けは全国各地で出土し、県内においても大中の湖南遺跡をはじめ多くの遺跡から出土しているが、泥除けの機能や使用法はいまのところ不明である。

保存処理は、柄から鍬先および泥よけを外しPEG含浸法により実施した。PEG含浸処理後は、鍬先の欠損部は合成樹脂の混合物を充填し成形した⁽⁴⁾。なお、展示活用のため、保存処理前にシリコンによる型取りを実施し精巧なレプリカを作成した。

真野古墳・埴製合子、武器、武具、工具（写真15・16）

大津市真野古墳は、琵琶湖の北湖と南湖の境界を見下ろす大津市北郊の丘陵に位置する。1996年に発掘調査が実施され、木棺は腐朽し消滅していたが、埋葬主体部より埴製合子と埴製桶形容器が検出された。埴製合子のなかには多くの鉄製品が収納されていたことから、まず合子ごとX線ラジオグラフィーにより内部の観察をおこなった⁽⁵⁾。その結果、合子のなかには鉄製の武器や武具が整然と収納されている様子が確認できた。いっぽう、埴製桶形容器のなかには鉄斧などの工具が収納されていた。

合子の内容物を精査しながら取り出した。その過程で、埴製合子のなかに納められた鉄製品のなかに、ミニチュアの短甲が含まれていることが判明し、特殊な副葬品であることが注目された。保存処理法として、鉄器の多くはサビに覆われておらず脆弱化していたため、注意しながら表面のサビを除去し、アクリル樹脂の減圧含浸処理による強化を



写真9. 鞄の取り上げ保存（雪野山古墳・1989）

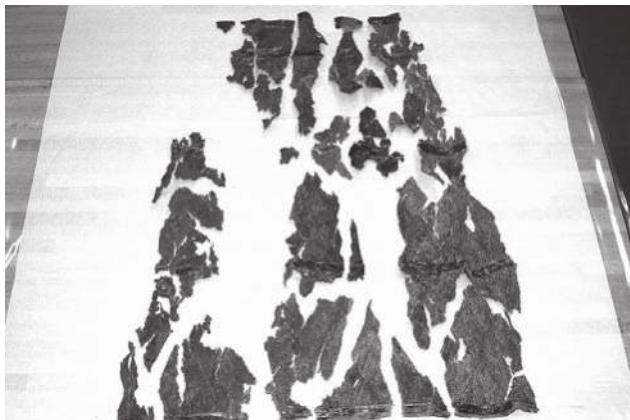


写真10. 鞄の整理作業



写真11. 柄付き包丁（加茂遺跡・1993）

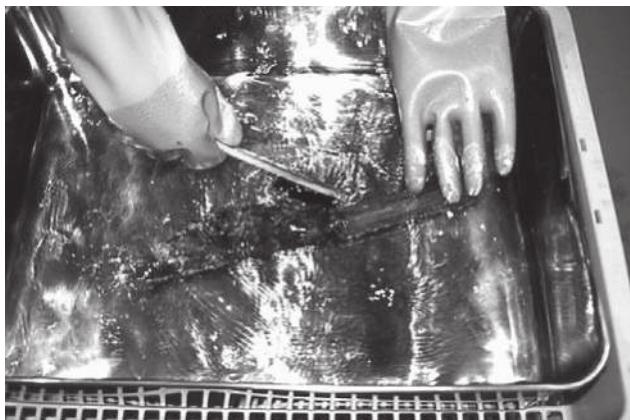


写真12. 柄付き包丁の洗浄（高級アルコール法）



写真13. 泥除け付広鉤（中兵庫遺跡・1996）



写真14. 泥除け付広鉤の復元作業



写真15. 塗製合子のX線写真撮影（真野古墳・1996）



写真16. 合子内副葬品の精査

実施した。埴製合子などの土製品は、別途溶剤樹脂含浸法により処理を実施した。

北山古墳・獸帶鏡（写真17、18） 通常、緑青色のサビに覆われている青銅製品の多くは、安定したサビである塩基性炭酸銅に覆われており青銅製品を保護する役目を果たす。いっぽう、明るい緑色のスポット状のサビの場合はプロンズ病の疑いがある。長浜市北山古墳出土の獸帶鏡においても、数カ所にこの症状がでており、そのままの状態にしておくと内部に腐食が進行し最悪の場合紛化する危険性があった。

保存処理前に実施する事前調査で、X線ラジオグラフィーによる検査を実施した。その結果、獸帶鏡に展開する5匹の獣のX線画像が鮮明に映し出された。しかしながら、鏡全体に走る大きな亀裂にまじり、微細な亀裂が無数に検出された。前述したプロンズ病の対策は、銅製品および青銅製品の防錆処置であるベンゾトリアゾール法を採用した。ベンゾトリアゾールの3%エチルアルコール溶液に漬けた。強化処置は、アクリル樹脂（パラロイドB-72）を減圧含浸させた。

鏡片の接合および欠損部の充填は実施しない方針とした。これは鏡片が非常に薄く、接着剤による接合では強度が低いと判断したためである。なお、展示などへの活用は平面で配置することで十分である。

（5）第5期（2001～2005年）

入江内湖遺跡・丸木舟（写真19・20） 米原市入江内湖遺跡は、その遺跡名が示すとおり旧内湖で1944年に干拓が開始され、現在は農地として利用されている。丸木舟は、いずれも内湖遺跡特有の腐植土を含む泥ないし砂層から出土している。3号丸木舟を除く4隻の丸木舟はほぼ完形で出土したが、いずれも木質の腐朽が進み脆弱化していた。1号丸木舟における現場での応急処置は、冬季の出土であったため不織布とエーキャップシートで保護し凍結を予防するとともに、安全で効率的な取り上げ方法について検討した。1～3号の丸木舟は、従来から使用している発泡硬質ウレタン樹脂による梱包をおこない現地から搬出した。

4および5号丸木舟の取り上げは、ウレタン樹脂の発泡が不良となり作業性が劣ることから、取り上げにはFRP工法⁽⁶⁾を採用することにした。強化用の繊維には、ガラス繊維、樹脂を使用して成型した。保護した丸木舟は、現場で反転し運搬用架台に載せて搬出した。

大型出土木材の保護と強化にFRPを使用するさいの利点としては、さまざまな形状に対応が可能であり、繊維の素材、強化材の構造を選択することにより強度の調整ができる。また、即硬化性の樹脂であり作業性がよく、ウレタン樹脂の発泡と硬化のさい生じるひずみや変形が発生しない。また、ウレタン樹脂に比べて使用する樹脂量が少なく、使用後の廃棄処分が容易であることなどがあげられる。

県内における縄文時代の丸木舟の出土例は、すでに20隻以上にのぼっているが、まだ入江内湖遺跡に埋没している丸木舟は相当数あることが予想される。しかしながら、将来にわたり低湿地の環境が維持されるという保証はなく、地下水により2千年以上も保護されてきた丸木舟などの有機質遺物が旧内湖の環境の変化により消失することが危惧される。

入江内湖遺跡・赤漆塗り容器（写真21・22） 入江内湖遺跡は、前述したように干拓地であるため地下水位が高く、木製品や漆製品、さらに網代などの植物質遺物や骨角器が分解されずに良い状態で残っている。縄文時代の漆製品として、鉢や皿と推定される大型の漆塗り容器の断片が数多く出土している。そのなかで赤漆塗り容器は完全な形で出土した。漆膜に含まれる赤色顔料を蛍光X線分析法により分析した結果、ベンガラであることが判明した。漆に赤色顔料を混ぜ器物に塗布することにより、木地の耐久性を高めるとともに、美的な要素も加えられた。形態的には鉢に相当するが、口縁近くに大小2個の孔があり、この孔に柄を差し込んで柄杓として使用した可能性もある。

赤漆塗り容器の用材はトチノキで、木胎は腐朽し大変柔らかくなっていた。そのためPEG含浸法による保存処理を実施した。この保存処理の特徴は、処理中に変形することのないよう、あらかじめ漆容器の外側と内側に合成樹脂で型をつくり、PEG含浸処理後の固化する間この合わせ型の中に入れて固定し変形を防止した。

（6）第6期（2006～2010年）

西河原宮ノ内遺跡・木簡削屑（写真23・24） 木簡の真空凍結乾燥法による保存処理は、大津市東光寺遺跡出土の呪符木簡をはじめとして、野洲市湯ノ部遺跡出土木簡、長浜市鴨田遺跡出土斎串や人形・巡礼札など総数806点を数える。木簡の多くは長期間地下に埋没していたため木質が劣化している。出土後は大気に触れて酸化するとともに、その保管状態によりカビの発生や取り扱いによる墨の流失の危険性がある。

野洲市西河原宮ノ内遺跡から出土した木簡は、習書木簡の類と考えられ、字を削り取ったさいの削屑である。出土後、ポリ袋に入れ保管されていたが、劣化が進行していたため、2008年に真空凍結乾燥法により保存処理を実施した。真空凍結乾燥法とは、水分を含んだものを-30℃以下で急速に凍結し、さらに減圧して真空状態で内部の水分を昇華させて乾燥させる方法で、乾燥による収縮や変形が少なく、処理後は色が明るくなり、その結果墨書なども見やすくなるのが特徴である。削屑のなかに、万葉仮名で「奈尔波…」と書かれたものがあり、古今和歌集に編纂された「難波津の歌」を習い書きしたものと考えられ、今後の資料の活用が望まれる。

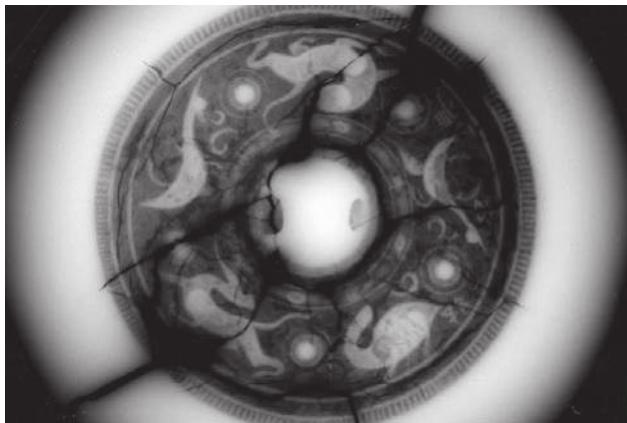


写真17. 獣帶鏡 X線写真（北山古墳・1996）



写真18. 獣帶鏡にブロンズ病が発生（左がわ）



写真19. 1号丸木舟の取り上げ（入江内湖遺跡・2002）



写真20. 5号丸木舟のPEG含浸処理（2005）



写真21. 赤漆塗り容器の保存処理（入江内湖遺跡・2005）



写真22. 保存処理後の赤漆塗り容器



写真23. 木簡の前処理（西河原宮ノ内遺跡・2008）

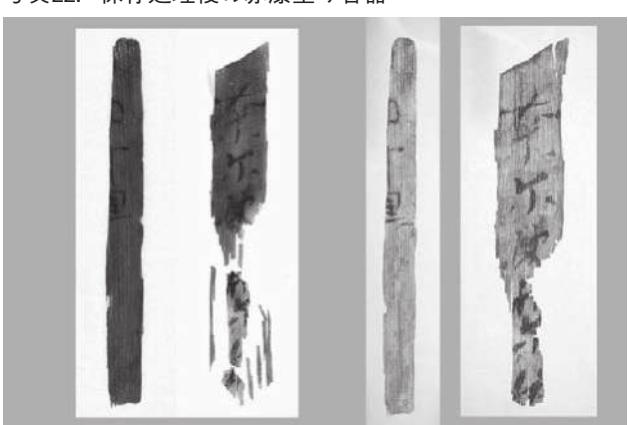


写真24. 木簡の保存処理（左：処理前 右：処理後）

まとめ

文化財保存の分野ではよく言われることであるが、保存処理や保存修復を施したものはそのままの状態を永遠に保つことはできず、10年20年、50年といった期間において再修理が必要とされる。考古資料の場合でも、保管環境などが不適切な場合、再度の保存処理が必要とされる。最近の文化財の保存修復の考え方は、資料が劣化したならば保存修復を施すというこれまでのながれから、できる限りの対策を講じて劣化を予防する方向にある。

保存処理された資料は、出土遺跡ごと、あるいは材質ごとに収蔵庫に保管され、将来の活用の機会を待っている。資料が良好な状態を保つとともに、活用の機会に応えるためには、収蔵環境の整備をはじめとした日頃の管理が重要な課題となってきている。

註

- (1) 発泡プラスチックの一種で、原材料のウレタン樹脂中にガスを細かく分散させて発泡させたもの。軟質ウレタン樹脂製品にはスポンジがあり、硬質ウレタン樹脂は断熱材として広く使用される。
- (2) エポキシ系接着剤（商品名：トマックNR-51）は、接着強度が大きく乾燥した土壤に使用する。また、ウレタン系接着剤（商品名：トマックNS-10）は、多少水分を含んだ土壤で使用する。
- (3) 高級アルコールとは、天然の脂肪や油脂から合成され、とくに炭素数6以上のアルコールをいう。特徴として、炭素数が多くなるほど親水性が弱まるため、処理後の資料を湿度の高いところにおいても中の樹脂が溶出することはない。しかしながら、処理の過程でメチルアルコールなどを加温するため、整備された安全な施設が必要である。
- (4) パテ状のもので、ガラス・マイクロバルーンおよびフェノール・マイクロバルーンとエポキシ系樹脂の混合物。
- (5) X線ラジオグラフィー（X線写真法）における画像の記録は、長い間X線フィルムによる画像観察が主流であったが、デジタル化によりフィルムの生産が中止されることが懸念される。X線フィルムにかわる記録媒体として、デジタルX線センサーと呼ばれるシステムに取って代わろうとしている。
- (6) F R P (Fiber Reinforced Plastics) 工法は、合成樹脂をガラス繊維やガーゼなどの繊維質のもので強化する方法で、樹脂にポリエーテルポリオール（商品名：ハイ・キャスト）を使用した。硬化時間は約10分で、取り扱いが容易である。ちなみに丸木舟1隻を保護するために使用する樹脂は発泡硬質ウレタン樹脂の場合、約40kgであるのに対し、この樹脂は約6kgであり、廃棄するさい環境にやさしい材料である。

文献

*表2・3に対応。機関名については以下の略称を用いた。滋賀県教育委員会→県教委。
市（町）教育委員会→市（町）教委。財團法人滋賀県文化財保護協会→県協会。

1. 大橋信弥・谷口徹（1978）「草津市志那中遺跡の井戸2例」『滋賀文化財だより』14、県協会
2. 高島町教委（1980）『鴨遺跡』
3. 県教委・県協会（1991）『高田館遺跡』
4. 中川正人（1983）「新庄城遺跡出土漆膜の保存処理」『国道161号線バイパス関連遺跡調査概要』県教委・県協会
5. 中川正人（1997）「大津市穴太遺跡における遺構・遺物の保存処理」『穴太遺跡発掘調査報告書II』県教委・県協会
6. 中川正人（1983）「新旭町二子塚古墳出土環頭太刀の保存処理」『滋賀文化財だより』78、県協会
7. 県教委・県協会（1979）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VI-5』
8. 米原町教委（1984）『三大寺遺跡群』
9. 中川正人（1997）「縄文時代丸木舟の保存と活用－長命寺湖底遺跡出土例より－」『文化財保存修復学会第19回大会・発表要旨集』文化財保存修復学会
10. 県教委・県協会（1987）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XIV-6』
11. 県教委（1990）『延暦寺防災施設工事・発掘調査報告書』
12. 中川正人「横土井遺跡出土陶棺の復元修理について」（1985）『横土井遺跡発掘調査報告書』県協会・県協会
13. 県教委・県協会（1997）『穴太遺跡発掘調査報告書II』
14. 県教委・県協会（1994）『北萱遺跡発掘調査報告書』
15. 県教委・県協会（1993）『南滋賀遺跡』
16. 林博通・栗本政志（1983）「近江国府関連官衙跡の調査」『古代文化』Vol.35、財團法人古代學協會
17. 中川正人（1998）「木製盾の造形技法と系譜」『赤野井湾遺跡』県教委・県協会
18. 県教委・県協会（2001）『山賀遺跡』
19. 沢田正昭・中川正人（1998）「遺構の化学分析と保存処理」『特別史跡彦根城跡表御殿発掘調査報告書』彦根城博物館
20. 県教委・県協会（1990）『妙見山遺跡』
21. 中川正人（1985）「宮ノ前遺跡出土の和同開珎の保存処理と材質分析」『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書VII-4』県教委・県協会
22. 県教委・県協会（2001）『穴太遺跡発掘調査報告書IV』
23. 中川正人（1986）「近世墓木棺の取り上げ保存」『栗東町久徳家墓他遺跡発掘調査報告書』県教委・県協会
24. 五個荘町教委（1986）『五個荘町内遺跡分布調査報告書』
25. 彦根市教委（1985）『葛籠北遺跡』
26. 県教委・県協会（1986）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書XIII-2』
27. 県教委・県協会（1998）『赤野井湾遺跡』
28. 今津町教委（1986）『今津町文化財調査報告書第5集』
29. 中川正人（1986）「光相寺遺跡出土柳行李の保存処理について」『中主町文化財調査報告書』中主町教委
30. 中川正人（2001）「穴太廢寺出土遺物の材質調査」『穴太遺跡発掘調査報告書IV』県教委・県協会

31. 県教委・県協会（1986）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X
III-2』
32. 中川正人（1988）「横尾山古墳における出土遺物の保存処理」
『横尾山古墳群発掘調査報告書』県教委・県協会
33. 中川正人（1988）「松原内湖遺跡出土巻胎漆器の技法について」
『滋賀考古学論叢 第4集』、滋賀考古学論叢刊行会
34. 県教委・県協会（1992）『松原内湖遺跡発掘調査報告書II』
35. 県教委・県協会（1993）『松原内湖遺跡発掘調査報告書I』
36. 中川正人（1988）「入江内湖遺跡出土木製高杯の保存処理」
『入江内湖遺跡発掘調査報告書』米原町教委
37. 県教委・県協会（1987）『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書X
IV-2』
38. 能登川町教委（1988）『能登川町埋蔵文化財調査報告書第10集』
39. 中川正人（1988）「木製盾の造形技法と系譜」『赤野井湾遺跡』
県教委・県協会
40. 県教委・県協会（1989）『堂田・市子遺跡（2）』
41. 県教委・県協会（2002）『小津浜遺跡』
42. 成瀬正和・岡田文男・中川正人（1992）「松原内湖遺跡出土漆
塗り木製品の材質と技法」『松原内湖遺跡発掘調査報告書I』県
教委・県協会
43. 中川正人（1995）「古代勢多唐橋の復元－大型出土木材の保存
と展示－」『保存科学研究集会95・研究発表要旨集』奈良国立文
化財研究所
44. 湖西線関係遺跡発掘調査団（1973）『湖西線関係遺跡調査報告
書』県教委
45. 中川正人（1996）「雪野山古墳出土漆製品の材質と技法」『雪
野山古墳の研究・考察編』雪野山古墳発掘調査団
46. 栗東町文化体育事業団（1990）『栗東町埋蔵文化財調査年報
（1989年度）』
47. 中川正人（2002）「大中の湖南遺跡出土木製品の保存処理」·
『緊急地域雇用特別交付金事業に伴う出土文化財管理業務報告
書』県教委・県協会
48. 県教委（1990）『平成2年度滋賀県文化財調査年報』
49. 中川正人（1992）「北谷七号墳出土銀象嵌柄頭の保存処理」
『滋賀県埋蔵文化財調査年報－平成2年度－』県教委
50. 伊庭功・岩橋隆浩・中川正人・松井章（1991）「淡水貝塚の發
掘調査－滋賀県栗津湖底遺跡－」『日本文化財科学会第8回大
会・発表要旨集』日本文化財科学会
51. 県教委・県協会（1997）『栗津湖底遺跡第3貝塚』
52. 県教委・県協会（2008）『烏丸崎遺跡・津田江湖底遺跡』
53. 栗東町文化体育事業団（1993）『栗東町埋蔵文化財調査年報
（1991年度）』
54. 県教委・県協会（1978）『森浜遺跡発掘調査報告書』
55. 県教委・県協会（2005）『中畠遺跡II』
56. 栗東町教委（1998）『和田古墳群』
57. 県教委・県協会（1996）『小川原遺跡III』
58. 県教委・県協会（1994）『加茂・一ノ坪遺跡発掘調査報告書』
59. 県教委・県協会（2000）『襖遺跡』
60. 中川正人（1996）「正樂寺遺跡出土遺物の保存と材質調査」
『能登川町文化財調査報告書第40集』能登川町教委
61. 県教委・県協会（1992）『針江北・針江川北遺跡（I）』
62. 県教委・県協会（2001）『中兵庫遺跡』
63. 県教委・県協会（2000）『觀音寺城下町遺跡』
64. 今津町教委（1998）『妙見山遺跡発掘調査概要報告書』
65. 県教委・県協会（1998）『虎御前山遺跡』
66. 県教委・県協会（1997）『大亥遺跡II・鴨田遺跡IV』
67. 虎姫町教委（1997）『五村遺跡』
68. 県教委・県協会（1995）『湯ノ部遺跡発掘調査報告書I』
69. 県教委・県協会（2000）『人塚遺跡』
70. 中川正人（2003）「第1調査区出土の丸木舟の保存処理」『尾
上浜遺跡』県教委・県協会
71. 県教委・県協会（2008）『柳遺跡IV』
72. 野洲町教委（2001）『天王山古墳・円山古墳・甲山古墳調査整
備報告書』
73. 県教委・県協会（2002）『緊急雇用特別交付金事業に伴う文化
財管理業務報告書』
74. 県教委・県協会（2003）『下鉤遺跡』
75. 県教委・県協会（2002）『入江内湖西野遺跡』
76. 中川正人（2004）「鳥帽子の材質調査と製作技法」『下五反田
遺跡』県教委・県協会
77. 県教委・県協会（2007）『入江内湖遺跡I』
78. 県教委・県協会（2005）『膳所城下町遺跡』
79. 県教委・守山市教委・県協会（1980）『服部遺跡発掘調査概
要』
80. 中川正人「大臼の保存処理」（2008）『柳遺跡』県教委・県協
会
81. 県教委・県協会（2007）『関津遺跡I』
82. 中川正人（2004）「縄文時代丸木舟の保存と活用（3）－入江
内湖遺跡出土例より－」『文化財保存修復学会第26回大会・発表
要旨集』文化財保存修復学会
83. 県教委・県協会（2006）『国領遺跡』
84. 県教委・県協会（2001）『西河原宮ノ内遺跡II』
85. 県教委（2009）『史跡紫香楽宮跡確認調査事業報告書』
86. 県教委・県協会（2006）『竜ヶ崎A遺跡』

図・表・写真典拠

図1 中川作成。

表1～3 中川作成。

写真1～24 中川作成。

(なかがわ まさと：調査整理課 副主幹)

表2 主要保存処理資料一覧（1）

番号	遺跡名	所在地	資料名	種類	保存処理法	処理年月日	文献番号
第1期(1981-1985)							
1	志那中遺跡	草津市	椀	木製品	PEG含浸法	19810528	1
2	鴨遺跡	高島町	椀	木製品	PEG含浸法	19810618	2
3	高田館跡遺跡	今津町	鉄鏃	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19820623	3
4	新庄城遺跡	新旭町	漆膜	漆製品	溶剤樹脂含浸法	19820909	4
5	穴太遺跡	大津市	箕	織維製品	PEG含浸法	19821001	5
6	二子塚古墳	新旭町	環頭太刀	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19821018	6
7	大日山古墳群	大津市	大刀・他	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19821106	
8	塚原古墳群	愛知川町	太刀	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19821207	7
9	穴太遺跡	大津市	足跡	遺構	PEG含浸法	19821225	5
10	三大寺遺跡	米原町	鉄鏃・馬具・他	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19830225	8
11	穴太遺跡	大津市	土層転写	遺構保存	溶剤樹脂含浸法	19830603	5
12	長命寺湖底遺跡	近江八幡市	丸木舟	木製品	PEG含浸法	19830704	9
13	小御門古墳群	日野町	鳥帽子	漆製品	溶剤樹脂含浸法	19830831	10
14	比叡山延暦寺遺跡	大津市	地鎮具	遺構	溶剤樹脂含浸法	19831110	11
15	横土井遺跡	草津市	陶棺	土製品	溶剤樹脂含浸法	19840121	12
16	穴太遺跡	大津市	移動式カマド	土製品	溶剤樹脂含浸法	19840215	13
17	北萱遺跡	草津市	鎌	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19840225	14
18	南滋賀遺跡	大津市	木沓	木製品	PEG含浸法	19840401	15
19	野畠遺跡	大津市	椀・斎串・他	木製品	PEG含浸法	19840401	16
20	服部遺跡	守山市	朱塗有孔板	木製品	PEG含浸法	19840401	17
21	山賀遺跡	守山市	鎌	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19840523	18
22	彦根城表御殿跡	彦根市	遺構強化	遺構	溶剤樹脂含浸法	19840801	19
23	妙見山遺跡	今津町	大刀	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19840820	20
24	宮ノ前遺跡	日野町	銅貨	青銅製品	溶剤樹脂含浸法	19841020	21
25	穴太遺跡	大津市	銀製押出佛	銀製品	溶剤樹脂含浸法	19841113	22
26	下鉤(久徳家墓)遺跡	栗東町	木棺	遺構	溶剤樹脂含浸法	19850123	23
27	正源寺遺跡	五個荘町	紡織具	木製品	PEG含浸法	19850401	24
28	穴太遺跡	大津市	斎串・他	木製品	PEG含浸法	19850522	13
29	葛籠北遺跡	彦根市	馬具(轡)	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19850607	25
30	柿ノ木原遺跡	近江八幡市	曲物枠	木製品	PEG含浸法	19850701	26
31	赤野井湾遺跡	守山市	網代	織維製品	PEG含浸法	19850902	27
32	北仰遺跡	今津町	甕棺墓	遺構	溶剤樹脂含浸法	19850920	28
33	志那北遺跡	草津市	木製鞍	漆製品	PEG含浸法	19851021	
34	光相寺遺跡	中主町	柳行李	織維製品	PEG含浸法	19851014	29
35	穴太遺跡	大津市	風鐸	青銅製品	溶剤樹脂含浸法	19851101	30
36	勧学院遺跡	近江八幡市	柳行李	織維製品	PEG含浸法	19851216	31
37	横尾山古墳群	大津市	釘・鉄鈴・他	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19851219	32
第2期(1986-1990)							
38	松原内湖遺跡	彦根市	巻胎漆器	漆製品	PEG含浸法	19860315	33
39	横尾山遺跡	大津市	木炭桟断面	遺構	溶剤樹脂含浸法	19860424	32
40	松原内湖遺跡	彦根市	鍬先	木製品	PEG含浸法	19860625	34
41	松原内湖遺跡	彦根市	丸木舟	木製品	PEG含浸法	19860710	35
42	入江内湖周辺遺跡	米原町	高杯	木製品	PEG含浸法	19860728	36
43	下ノ郷遺跡	甲良町	竈跡	遺構	溶剤樹脂含浸法	19860729	37
44	斗西遺跡	能登川町	築	遺構	溶剤樹脂含浸法	19860828	38
45	赤野井湾遺跡	守山市	朱塗り盾	木製品	PEG含浸法	19870717	39
46	松原内湖遺跡	彦根市	へら状木製品	木製品	PEG含浸法	19870928	35
47	堂田遺跡	蒲生町	馬鍬	木製品	PEG含浸法	19870928	40
48	小津浜遺跡	守山市	柄付き刀子	鉄製品	高級アルコール法	19880227	41
49	松原内湖遺跡	彦根市	結歎豎櫛	漆製品	PEG含浸法	19880509	42
50	松原内湖遺跡	彦根市	きぬがさ	漆製品	PEG含浸法	19880624	42
51	唐橋遺跡	大津市	橋脚部材	木製品	PEG含浸法	19880702	43
52	滋賀里遺跡	大津市	椀・他	木製品	PEG含浸法	19880928	44
53	針江浜遺跡	新旭町	噴砂断面	遺構	溶剤樹脂含浸法	19890927	
54	雪野山古墳	八日市市	鞆	漆製品	溶剤樹脂含浸法	19891017	45
55	狐塚遺跡	栗東町	炉跡	遺構	溶剤樹脂含浸法	19891124	46
56	大中の湖南遺跡	安土町	木偶・他	木製品	PEG含浸法	19900131	47
57	北谷古墳群	草津市	劍・太刀・馬具・他	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19900420	48
58	北谷古墳群	草津市	銀象嵌柄頭	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19900420	49
59	粟津湖底遺跡	大津市	貝塚断面	遺構	溶剤樹脂含浸法	19910325	50

表3 主要保存処理資料一覧（2）

番号	遺跡名	所在地	資料名	種類	保存処理法	処理年月日	文献番号
第3期(1991-1995)							
60	栗津湖底遺跡	大津市	箒	繊維製品	溶剤樹脂含浸法	19910522	51
61	鳥丸崎遺跡	草津市	噴砂断面	遺構	溶剤樹脂含浸法	19911119	52
62	狐塚遺跡	栗東町	木製埴輪	木製品	PEG含浸法	19920121	53
63	森浜遺跡	新旭町	琴	木製品	PEG含浸法	19920401	54
64	中畠遺跡	草津市	カラスキ	木製品	PEG含浸法	19920618	55
65	和田古墳群	栗東町	馬具	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19930211	56
66	小川原遺跡	甲良町	配石遺構	遺構	溶剤樹脂含浸法	19930312	57
67	加茂遺跡	近江八幡市	柄付き包丁	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19930507	58
68	襖遺跡	草津市	櫛未製品	木製品	PEG含浸法	19940401	59
69	赤野井湾遺跡	守山市	木器一括	木製品	PEG含浸法	19940401	27
70	小篠原遺跡	野洲町	盾形木製埴輪	木製品	PEG含浸法	19940401	
71	正樂寺遺跡	能登川町	人骨	遺構	PEG含浸法	19940726	60
72	針川江北遺跡	新旭町	木棺部材	木製品	PEG含浸法	19941025	61
73	小津浜遺跡	守山市	木器一括	木製品	PEG含浸法	19950517	41
74	鳥丸崎遺跡	草津市	木棺板材	木製品	PEG含浸法	19950901	52
第4期(1996-2000)							
75	中兵庫遺跡	草津市	泥除け付広鍬	木製品	PEG含浸法	19960425	62
76	觀音寺城下町遺跡	安土町	網代	繊維製品	PEG含浸法	19960620	63
77	真野古墳	大津市	埴製作子	土製品	溶剤樹脂含浸法	19960717	
78	真野古墳	大津市	武器・武具一括	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19960717	
79	妙見山古墳群	今津町	劍・他	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19960926	64
80	北山古墳	虎姫町	鏡	青銅製品	溶剤樹脂含浸法	19961121	65
81	北山古墳	虎姫町	短甲	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19961211	65
82	鴨田遺跡	長浜市	地蔵菩薩立像	木製品	真空凍結乾燥法	19970416	66
83	五村遺跡	虎姫町	木器一括	木製品	PEG含浸法	19970608	67
84	鴨田遺跡	長浜市	巡礼札	木製品	真空凍結乾燥法	19970827	66
85	湯ノ部遺跡	中主町	木簡	木製品	真空凍結乾燥法	19971217	68
86	人塚・耳塚古墳	伊吹町	大刀・他	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19980611	69
87	尾上浜遺跡	湖北町	丸木舟	木製品	PEG含浸法	19980630	70
88	柳遺跡	草津市	黒漆塗り盾	漆製品	PEG含浸法	19980701	71
89	甲山古墳	野洲町	金具	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	19980709	72
90	東光寺遺跡	大津市	木簡	木製品	真空凍結乾燥法	19980708	73
91	下鈎遺跡	栗東町	小銅鐸	青銅製品	溶剤樹脂含浸法	19980811	74
92	入江内湖西野遺跡	米原町	豎櫛	漆製品	PEG含浸法	20000508	75
93	下五反田遺跡	新旭町	鳥帽子	漆製品	PEG含浸法	20000713	76
第5期(2001-2005)							
94	入江内湖遺跡	米原町	丸木舟(1号)	木製品	PEG含浸法	20020206	77
95	入江内湖遺跡	米原町	丸木舟(2号)	木製品	PEG含浸法	20021022	77
96	膳所城下町遺跡	大津市	断面剥ぎ取り転写	遺構	溶剤樹脂含浸法	20021113	78
97	入江内湖遺跡	米原町	丸木舟(3号)	木製品	PEG含浸法	20030122	77
98	服部遺跡	守山市	豎櫛	漆製品	溶剤樹脂含浸法	20030401	79
99	北黄瀬遺跡	信楽町	井戸枠	木製品	PEG含浸法	20030701	
100	柳遺跡	草津市	大臼・他	木製品	PEG含浸法	20030701	80
101	入江内湖遺跡	米原町	丸木舟(4号)	木製品	PEG含浸法	20030912	77
102	閔津遺跡	大津市	木棺墓	遺構	PEG含浸法	20031210	81
103	入江内湖遺跡	米原町	丸木舟(5号)	木製品	PEG含浸法	20040212	82
104	針江浜遺跡	新旭町	護岸材	木製品	PEG含浸法	20040803	
105	入江内湖遺跡	米原町	漆塗り容器	漆製品	PEG含浸法	20050131	77
106	国領遺跡	彦根市	柿経	木製品	真空凍結乾燥法	20050215	83
107	西河原宮ノ内遺跡	中主町	木簡削屑	木製品	溶剤樹脂含浸法	20050215	84
108	甲賀寺跡遺跡	信楽町	壁	遺構	溶剤樹脂含浸法	20050401	85
第6期(2006-2010)							
109	竜ヶ崎A遺跡	安土町	櫛	木製品	PEG含浸法	20060405	86
110	入江内湖遺跡	米原市	漆塗り豎櫛	漆製品	PEG含浸法	20061205	77
111	入江内湖遺跡	米原市	柄付き刀子	鉄製品	溶剤樹脂含浸法	20071016	77
112	閔津遺跡	大津市	井戸枠・他	木製品	PEG含浸法	20071016	81
113	塩津港遺跡	西浅井町	木札・祭祠具	木製品	PEG含浸法	20080501	
114	西河原宮ノ内遺跡	野洲市	木簡	木製品	真空凍結乾燥法	20080617	
115	番場遺跡	日野町	網代	繊維製品	PEG含浸法	20081127	
116	春日北遺跡	日野町	窯跡	遺構	溶剤樹脂含浸法	20091029	
117	下羽田遺跡	東近江市	竈跡	遺構	溶剤樹脂含浸法	20101003	
118	相谷遺跡	東近江市	断面剥ぎ取り転写	遺構	溶剤樹脂含浸法	20101003	

【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した3本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていきたい。

他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南市夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市觀音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなっていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるよう伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いするだいである。

編集担当（T-T）

紀 要 第24号 一設立40周年記念号一

刊行年月日：平成23年（2011年）3月31日

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 (fax) 077-543-1525 (e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.24 2011.3